



元気っ子

No.275 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

6月も後半になりました。梅雨の季節ではありますが、近年の梅雨は昔ながらの「シトシト長雨」というよりは、各地に被害をもたらすような豪雨が続いています。もしかしたら今の子どもたちが大人になる頃には、梅雨のイメージは「ゲリラ豪雨」に変わってしまっているかもしれません。

そんなムシムシとした暑さによる熱中症対策とコロナウイルス感染防止のためのマスク着用との両立がとても難しく、厚労省も「適宜マスクを外し、熱中症の予防に努めること」との指針を出しています。当園もブログの方でお知らせしていますが、この指針に則って、熱中症の予防に努めています。どうぞご理解下さいますよう宜しくお願い致します。

どこかの大学の脳科学の教授がこのようなことを言っていました。

「幼いころにボーっとしたり、遊んだり、親に優しくしてもらうことは土地を拓げることに似ている。逆に勉強とか知識を詰め込んだりすることは建物を建てることに似ている。建物は高くはなるけれど、土地が拓がっていないと他の建物が建たなくなる」

まさに絶妙な例え方だと思います。保育園も含め、子ども時代というのは、しかるべき時期に備えて「いかに広大な土地を拓げておけるか」ということだと思います。そのためには子どもたちの「やってみようの心」、好奇心を引き出すような要素を保育の中に盛り込んでいくことがとても重要になります。これは子どもたちの主体性を育むということに繋がるのですが、少子化が進む現代においては、家庭、地域そして保育の現場においても子ども一人一人に目が行き届き、手が掛けられるようになってきています。当然、良い面もあります。ところがその反面、気を付けていないと、「教える」教育、「やってあげる」保育が行き届きすぎてしまい、子どもの主体性や意欲が育ちにくくなっているという一面も生まれます。つまり、自分でやってみたいという心が芽生える前に大人にやってもらっていると、「自分でやってみよう」という意欲がなくなってしまうということです。そしてこのことが進んでいくと、「言われた通りのことしかやらない」ということが増え、さらには「言われるまでやらない」そして最後には「やりたくない気持ち」だけが残されてしまいます。これでは子どもの主体性や意欲というものは育まれていきませんし、広大な土地は拓がっていきません。

子どもたちが、自分のことは自分で決める、「やりたい」と感じたことを自力でやってみる、そういう心を育むことが大切です。

そのためには、子どもたちの自律心が育つ環境を用意する必要があります。そのひとつが「活動選択」です。先日、うさぎ組の朝のお集まりで実際に子どもたちが自分の活動を選択する場面を見てきました（ホームページに動画も掲載しています）。子どもたちは実に色々な要因（人だったり、活動そのものであったり）で楽しそうに活動を自ら選択していました。この自己決定の積み重ねこそが自律心、主体性、意欲というものを育てていくのだと思います。

今後もこの環境設定を大切に、子どもたちの心の育ちをしっかりと見守る保育を心がけてまいります。

